

I'm happy enough to want to cry.

浜嶋です。
こんにちは。

I'm happy enough to want to cry.

「泣きたくなるほどうれしい」

先日、団会議の後で居酒屋に行った時のことでした。

「うれしかった」 ことがありました。

「うれしい」、「涙がでそうだ」と声を出しました。

吉田隊長がカブ隊の時に、隊長の私が言い続けていたことを覚えていて、その言葉に驚きました。

下村隊長は、環境展に出す「良い環境、悪い環境」の写真を提出することについて考えていました。活動プログラムに取りれる事が難しいことで悩んでいました。

私は、下村隊長に「できなかったらしなくていいんだよ。私も環境アジェンダ活動をしなかった。ワニバッジをスカウトに渡せなくて申し訳なかったことがある」

そこで、吉田隊長が、下村隊長に話したのです。

「浜嶋さんは、環境アジェンダの活動をしなさいと言っていました。カブブックをするのに手がいっぱい環境アジェンダはできないからです。

それで、この環境アジェンダ活動をカブ隊の活動に取り入れなかったですが、『いつもゴミは自分のポケットに入れる』ということをしていました。小さなことだけど、これだけで環境を考える活動をやっていることになるんじゃないかな」

私は、小学4年生の時に自覚して、ゴミ箱がなければ、ゴミはとりあえず自分のポケットに入れる。人のゴミも自分のポケットに入れる習慣を始めました。今でも変わりません。

ゴミをポケットだったり、カバンに入れます。

これをカブ隊の隊集会でときどき話していたのです。

それを覚えていてくれたことがうれしい。吉田隊長が指導者になっていなかったら、このことを聞くことはなかったでしょう。自分の言ったことを心に留めてくれたことは本当にうれしいことだと思いました。涙がでるほどにうれしいことです。

カブ年代で、自立した考えが芽生えているのですね。日本連盟は、スカウトの主体性を育てる教育方針を上げています。私たちは、スカウトを自立した個人として接することが重要ということを改めて自覚しました。簡単にいうと子供でも大人扱いするということです。組長、次長の制度、班長、次長の制度は、責任を持たせる活動です。

最大限に活用し、スカウトの成長を育みましょう。

話がそれましたが、カブ隊長を体験して、そのことで初めてうれしいことが起きました。
吉田隊長、ありがとう。

追伸：団委員会の報告で、バザーの日が11月3日になっていました。正しくは11月5日です。訂正します。